

鬼の足

大倉浩

〇、はじめに

大学院の授業を担当し始めて四年目になるが、院生とずっと『狂言記外五十番』(外篇)を版本で読んでいる。私と同時期に大学院におられた方々は、北原先生の授業で『絵入り狂言記』(正篇)や『続狂言記』を読んでいたのを覚えておいでだと思う。北原授業では、担当者が一つの曲を担当して発表する演習形式だったが、私の授業では『狂言記外五十番』と他の狂言台本との比較に主眼を置いている。全員で外篇を版本で読むのは北原授業と同じだが、読みながら集められるだけの狂言台本を準備して院生にあってがって、それぞれの目で、外篇の本文と他台本の本文との言葉や筋立ての比較をしてもらおうというねらいである。版本狂言記と他の狂言台本との比較は、すでに池田廣司先生(『版本狂言記の台本について』『国語』二二三)がなさっておられるし、私自身もその追認作業をやっているのだが、やはり複数の人間の目で比較することで、これまで気付かなかった問題やミス、新しい発見がいろいろと出てきて、反省し考えさせられ、とても有り難い。

一、五つ時分

先日も巻四「杭か人か」を、院生たちと大蔵流虎明本・鷺流森本・鷺流名女川本・和泉流狂言集成本の四種と比較しながら読んでいた(鷺流では曲目も「人か杭か」となっている)。本文の途中で臆病者の太郎冠者が夜回りを始める場面があり、外篇は「もはや五つ過じや」と時刻にふれるセリフがあるのだが、比較した四種の台本では虎明本だけが「是は五つ時分にもならふ」という類似したセリフを持っていた。このこと自体はすでに私もチェック済みであったし、この場面を含めて全体として外篇の「杭か人か」が、虎明本に近いこともすでに池田先生が指摘しておられることである。しかし、この「五つ」(現在の午後八時ごろにあたるという)という時刻の呼称は、果たして室町時代までさかのぼれるのか? 江戸時代のものなのか? 誰からともなく出てきた疑問に、私を含めて皆、首をかしげてしまった。日本語学の院生だから時制には詳しい人は多いが、時法には疎い。幸い日本史専攻の院生も授業に参加してくれていたので時法に関して調べてきてもらい、参考資料によって、こうした呼称が室町時代には存在して

いたことが判明した。あらためて外篇の狂言の古さを確認することにもなったが、さらにこのセリフをもう一度本文の文脈に戻してみると、「五つ」といえばまだ夜更けにはほど遠い時間であり、こんな宵の口の見回りにさえばくびくしてゐる太郎冠者の臆病さを象徴するのがこの「五つ」という言葉であったことに気づかされた。今まで何を読んでいたのだ、と叱られそうだが、こんな再発見が授業の中でいくつももある。

二、新大系『狂言記』

また、読み始めた平成八年には、外篇は昭和初めの有朋堂文庫に翻刻と簡単な注釈があっただけで、北原先生と私で準備していた索引が使えたものの、本文を読み解くことに苦勞も多かつた。しかし、翌年十一月に岩波の新大系『狂言記』が刊行され、外篇にも本格的な注釈が施されていて多くの恩恵を被ることになった。この新大系『狂言記』は、一冊で四種の版本狂言記全てを読むことができるし、挿し絵も別版を含めて全て載せているので比較もしやすくとて便利だ。特に『絵入り狂言記』(正篇)の挿し絵は、舞台の役者だけでなく、それを見る様々な観客の姿まで生き生きと描いており、芸能史・風俗史の資料としても価値がある。ただ、もともと四種の本を一冊にまとめたために無理(というか残念)なところもある。たとえば、本文は四種の版本狂言記全てが収録されているのだが、分量の関係で注釈は正篇・外篇の二種にしか施されておらず、残る百曲は本文のみで「付録」とい

う扱いになってしまっている。挿し絵についても全てが載せられているが、もともとは美濃版・半紙版の大きさの挿し絵を、縮小して本文の中に入れていたので、原画ならわかる役者や観客の細かな表情が見にくくなっているのも惜しい。

そうはいっても、ともかく新大系の注釈のおかげで、授業のほうは外篇の本文の理解が早まった。が、いっぽう我々の解釈とは異なる立場の注釈に出くわすことも出てきた。たとえば、新大系の注釈は、他の狂言台本を参考にして、場合によっては原文の役名を訂正してしまうことがある。我々の授業では、明らかな誤りと認められない限りは、原文のまままで解釈していくのが基本方針で、他の狂言台本との違いは、違いとしてとらえていた。具体的に言えば、巻一「琵琶借り座頭」の結末部分は、

▲勾当 をのれにまけうか ▲はくやう なふく／＼それかしじ
や。やあく／＼ ▲勾当 やあく／＼ ▲はくやう おてつかつた
ぞく／＼ ▲勾当 どこへおれをこかしてやるまいぞく／＼

(二二オ)

と原文にあるのを、新大系は、

勾当「をのれに負けうか (琵琶主)」「なふく／＼それがし
じや 伯養「やあく／＼ 勾当「やあく／＼ 伯養(・勾当)
「お手つ、勝つたぞく／＼ (琵琶主)」「どこへ、おれをこか
して、やるまいぞく／＼

(カッコが変更部分、二二九〜三〇ペ)

のように、大藏流や和泉流の台本の結末を参照して、伯養と勾当二人が間違つて琵琶主を打ち倒してしまふ結末と解している。確かに原文のように「なふく／＼それがしじや」を伯養のセリフと解するのは落ち着かないので、新大系のように琵琶主のセリフと見たいところだが、そこでセリフを切つてしまつて、その後だけが伯養のセリフ、また後の部分の役名まで変えてしまふのはどうだろうか。授業で比較した天正狂言本「馬借り座頭」では、伯養が勾当も借り主も打ち倒す結末になっていた。外篇「琵琶借り座頭」も、この天正本に近い、上位の勾当を伯養が打ち倒す下廻上の結末として原文通りに解釈しておきたいというのが我々の立場である。新大系の本文にはこうした変更が正篇・外篇ともに意欲的ともいえるほど目立つ。

三、外篇の挿し絵

もちろん、こうした解釈の違いは当然出てくるもので、だからこそ読み進める価値もあるわけだが、新大系の外篇の本文や挿し絵をよく見ていると、どうにもおかしいところがある。新大系の外篇の底本は、凡例によると京都大学文学部蔵本で、我々も同じ本のマイクロ写真に焼いたものを読んできており、北原・大倉『狂言記外五十番の研究』でもこの本を影印に使わせていただいた。この京大本は、私自身も実見させていただき、刷り自体はた

いへんよいものの紙の破れや、墨の書き込み・いたずら書きがある本という印象を持った。『狂言記外五十番の研究』の影印で、どの本を選択するかで北原先生と相談した際にも、この本についてはかなり検討した。外篇は、現存する完本が少ないため、初刷りと見られる野田版で、原表紙と題箋まで残っているという点で結局この京大本を影印したのであるが、本文や挿し絵だけなら他の蔵本や後刷りと見られる菱屋版にも保存のよいものが残つており、翻刻や索引にはそれら他の版本も参照して本文を作った。たとえば、京大本では巻一最終丁の二八丁は破れがあり、そのため「首引き」の挿し絵の鬼の足や舞台の板目が切れて見えない(図1)。ところが同じ挿し絵が新大系で見ると(二三五ペ)破れは修正されているようなのだが、板目だけが修正されていて、鬼の足



図1 京大本

は消えたままのおかしな挿し絵になっている(図2)。これは破れのない他の版本の挿し絵(図3)と比較すれば、中途半端な修正であることがすぐにわかるのだが、こうした修正処理については新大系には何の断りもない。「板目や鬼の足など、そんな些末なことを穿鑿して何になる」とお思いだろうか、版本で読んでいる我々にしてみれば「破れは破れのままでよいだろうに、何故こんな修正をする必要があるのだろうか?」という素朴な疑問を持たざるを得ない。

さらに読み進めていって気づいたのは巻五の挿し絵である。たとえば「樽髻」では、役者四人の頭が黒々として見えるように見える(図4京大本)。しかし、よく見るとこれは京大本にあるいたずら書きで、役者の月代のところに墨をつけたものなのだ。これも他の版本と見比べれば一目瞭然である(図5)。続く「二九十八」の挿し絵の男の頭、女の顔にも墨がつけられている(図6)など、京大本の巻五には特に挿し絵のいたずら書きが多い。これも実見してすぐに気づいたもので、墨が濃かったため前後の丁にまで写って汚していることさえあった。ところが、新大系では、「二九十八」の女の顔の墨は修正して消している(図7三三三べ)のに、男の頭の墨や「樽髻」の四人の頭の墨はそのままだのである。これも一貫性のない中途半端な修正で、他の巻五の挿し絵を見ても、消し損ねたいたずら書きの墨が所々に残っている。もちろん、授業でこんな修正のアラを探しても仕方がないのだが、「樽髻」の挿し絵の解説(三三二べ)に「四人とも若く描かれる」とあるのを見ると、もしかすると解説者はこの挿し絵のいたずら書き



図3 他の版本



図2 新大系

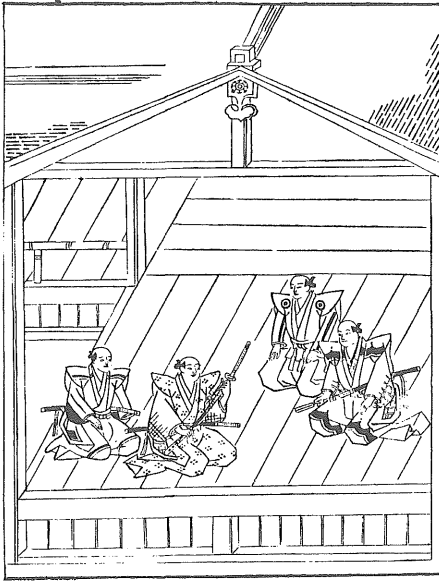


図5 他の版本

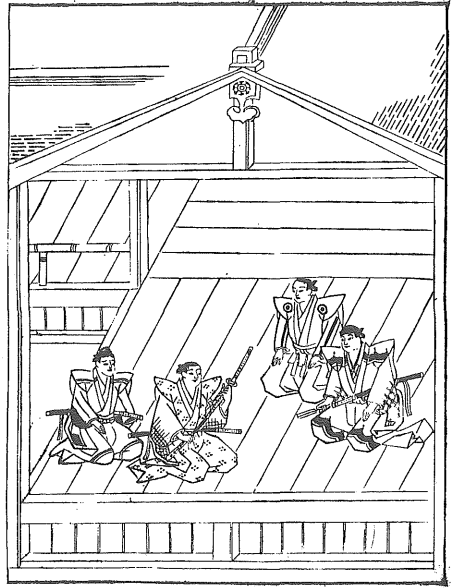


図4 京大本

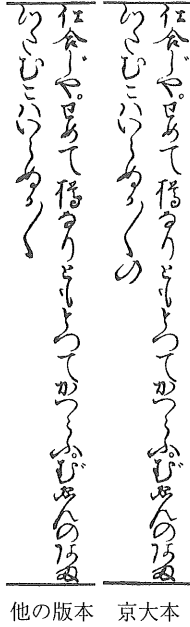


図7 新大系



図6 京大本

に気づかずに、月代を刺っていない若い役者と見ているのではと心配になる。この心配は挿し絵の扱いだけでなく本文にもあり、同じ「樽罈」の本文最終行「むんんのあまつたむこはいらぬか〈の〉」(二丁ウ7〜8行目)の最後の「の」も、京大本にだけある書き込み(左図参照)で、他の版本にはないのだが、新大系はそのまま「いらぬか〈の〉」と翻刻している。どうも、これらは挿し絵の修正の問題というより、外篇については底本である京大本と他の版本との比較による確認が、挿し絵ばかりでなく本文でも不充分だったために起こった不統一と考えざるを得なくなってくる。いずれにしても挿し絵だけでなく本文や解説への信頼を落としてかねない不用意な処置である。



京大本

他の版本

四、原本の重み

我々の授業では、外篇の版本を読み、注釈書や他の狂言台本を複数の人間の目で比べて行くという、何の変哲もない当たり前のことをやっている。そんな授業から生まれてきたこれらの発見であり、疑問である。私自身も横着をして、翻刻や写真で間に合わ

せた説明をしたり書いたりしたことがある。その意味でも決して他人事ではない。もちろんこんなことで「鬼の首」を取ったように得意になつてはいるわけでもない。実際、近年の写真複製、影印、画像修復の技術の向上は、原本を実見できない者と原本との距離を埋めるうえで大きな役割を果たしてきたと思うし、私も多くの恩恵を受けてきた。インターネットを使い、パソコン上で図書館の蔵書が見られるのは便利だ。だが、(見合い写真ではないが)アバタをエクボと見誤る危険性もまた増えることも確かである。「写し」はしよせん「写し」であつて本物ではないことをあらためて自分自身にも肝に銘じたい。便利さに寄りかかつて、原本にふれる喜びとその情報の重みを忘れてはならないとしみじみ思う。

(一九九九年八月三日 受理)